

復活日

ローマの信徒への手紙 第五章二〇節

「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。」

主教 イグナシオ 入江 修

2021 4月号

発行所
日本聖公会
横浜教区教務所
〒221-0852 横浜市神奈川
区三ツ沢下町14-57
TEL 045-321-4988
FAX 045-321-4978
発行人 入江 修
1部 55円 別

主のご復活を祝うイースターの前には大齋節がありま
す。イースター前の一週間は
聖週と言われ、ことに最後の
三日間、私たちは主イエスさ
まの受難を辿ります。大齋節
なしに、私たちは主のご復活
を迎えることはできません。
しかし、大齋が近づくと、
私は何とも重い気持ちになり
ます。それは、特にこの期節、
自分自身の罪と深く向き合わ
なければならぬということ
によって起こるのですが、実
は、それこそが大齋を大齋た
らしめるといえるのではない
でしょうか。

神さまが私たちのところに
愛する独り子をお遣わしに
なされたのは、私たち自身にそ
の罪を償わせるためであり
ません。もしそうであるなら
ば、独り子であるイエスさま
をお遣わしになる必要はあり
ませんでした。
そうではなく、イエスさま
が私たちのすべての罪を私た
ちに代わって負われ十字架に
お架かりになることで、神さ
まは、私たちがご自身に立ち
帰り、その罪を悔い改めて主
を救い主と信じることを求め
られました。

イエスさまの前に道を備え
るために遣わされたヨハネは、
荒野野で悔い改めの洗礼を宣
べ伝え、イエスさまは、「時
は満ち、神の国は近づいた。
悔い改めて福音を信じなさい
。」(マルコ一・十五)と
人々に告げておられます。
悔い改めるためには、自ら

聖パウロが語っているよう
に、「罪が増したところには、
恵みはなおいっそう満ちあふ
れました」(ローマ五・二〇)。
イエスさまがそのご生涯、
ことに十字架に至る道行を辿
られ、人びとの不条理な敵意
と辱めを甘んじて受けられる
とき、私たちの心はひどく痛
みます。それは、イエスさま
を救い主と信じながらも、自
らの罪によってイエスさまの
苦しみに私たち自身が加担し
ていることに気づかされるか
らではないでしょうか。
しかし、聖ルカの福音書第
十八章九節にある徴税人と
ファリサイ派の人の譬えの中
でイエスさまが言われている
ように、義とされて家に帰っ
たのは、ファリサイ派の人で
はなく、目を天に上げようと
もせず自らの胸を打ち、罪の
赦しを求めた徴税人なのです。
私たちが痛みをもつて自ら
の罪と向き合い、そこから目
を背けずその罪ある姿を認め
て、イエスさまによる救
いを求めるとき、私たちはイ
エスさまと共に罪に死んだ者
とされます。そしてイエスさ
まの苦しみに死によって、私
たちには復活の新たな命がも
たらされるのです。
ハレルヤ、主は甦られた!



十主教
イグナシオ

二月のある日、夕の礼拝
を終えて空を見上げると、
横浜では珍しく、頭上には
冬の星座であるオリオン座
が輝いていました。
アメリカ航空宇宙局
(NASA) は日本時間の二
月十九日の早朝に火星着陸
を遂げた探査車「パーサビ
アランス」から送られてき
た画像を公開しました。
地球から五億キロ、七カ
月近い旅の末、ようやく火
星に着陸したというニュー
スを聞くと壮大な宇宙に心
を奪われるのですが、宇宙
はそれよりはるかに大きく、
火星は地球のお隣さんで、
私たちがいる地球、いえ太
陽系ですら、宇宙の中では
ほんの小さな存在です。
そして、地球に降り注ぐ
光の中には、何億光年も離
れた星から放たれ、果てし
ない旅を経てようやく地球
に届いたものもあります。
一光年は光が一年間に進
む距離約九兆五千億キロで
す。「パーサビアランス」
が旅した五億キロですら、
その二万分之一に過ぎず、
光が何億年もかかって旅す
るといふ宇宙の壮大さには
圧倒されるばかりです。
東日本大震災から今年で
十年。あの日、地球から十
光年離れたところを旅して
いたいくつもの星の光、震
災で犠牲となられた多くの
方々がその前夜まで見上げ
ておられたであろう星空を
旅していた光が、今、私た
ちの目に届いているのです。
壮大な宇宙の一点である地
球、その表面にいる私たち
一人ひとり、宇宙全体か
ら見れば、その大きさは無
きに等しい存在です。
大齋始日の礼拝で私たち
は、「あなたはちりである
から、ちりに帰らなければ
ならないことを覚えなさい。
罪を離れてキリストに忠誠
をつくしなさい。」と言わ
れます。
しかし、神さまは独り子
をお与えになるほどに、そ
の一人ひとりを誰も漏れる
ことなく深く愛してくださ
り、立ち帰る者を死から命
へと招いておられます。